

時ときに憩いこう

良りょう

寛かん

薪たきぎも担にのうて翠すい岑しんを下くだる

翠すい岑しん路みちは平たいらかならず

時ときに憩いこう長松ちやうしやうの下もと

静しずかに聞きく春しゅん禽きんの聲こゑ

【作者】良寛（一七五八〜一八三二年）江戸時代末期の僧侶。本姓山本、幼名栄蔵（えいざう）、のち文孝（ふみたか）と改めた。字は曲

（まがり）、出家して良寛また大愚（たいぐ）と号した。越後（新潟県）出雲崎の人、家は代々神職と名主（なぬし）を兼ね父泰雄は以南（いなん）と号して越後俳壇（はいだん）の雄であった。良寛はその長子。成長して備中（岡山県）玉島の国仙和尚（こくせんおしょう）に学び、のち諸国を行脚（あんぎや）して帰国し国上山（くがみやま）の五合庵に入り、四十七歳から十三年間ここに住んだ。晩年麓の乙子（おとこ）神社の庵に移り天保二年一月貞信尼（ていしんに）に看取られ歿す。時に七十四歳。良寛は俳句、短歌に一家をなし書もまた当代第一と称せられた。

【語釈】*擔…かつぐ 背負う *翠 岑…春の青々とした峰 *長 松…丈（たけ）の高い松

*春 禽…春の鳥（鶯であろうか）

【通釈】薪を背負うて春の山路を下つてくる。美しいみどりの峰であるが、狭い路は平坦ではない。

青空にそびえたつ松の下にたどりつき休んでいると、どこからともなく禽（とり）の声が聞こえ疲れをなごませてくれる。耳を澄ますとあたりの静けさがひととき深く感ぜられるのである。